

月刊 地域支え合い情報

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。

特集 『食』でつなぐ



仮設住宅を訪問中の「産直 結ゆい」の移動販売車。新鮮野菜が住民に大人気だ

● 暮らしに寄り添う弁当屋「オアシス」③

オアシス（宮城県岩沼市）

● 笑顔と食の安心を届ける産直移動販売⑤

産直 結ゆい（岩手県大槌町）

● 「ここに来れば誰かに会える！」⑦

カフェは地域の居場所
のぞみセンター（宮城県山元町）

☆ 専門家に聞く地域づくりのヒント⑧

（仙台白百合女子大学 人間学部 健康栄養学科
准教授 神田 あづささん）

インタビュー あのの人に会いたい⑨⑨

社会福祉法人 石巻祥心会（宮城県石巻市）

まちの仕組み⑩⑩

原発避難後の古里再生に住民、商工業者らが一丸（福島県川内村）

支援員のための地域生活支援「困った」ときのQ&A⑫

地域の希望を再生させよう【希望学】からのメッセージ⑭⑭

（東京大学 社会科学研究所 教授 玄田 有史さん）

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ⑮

ひとりごと サポーターのあなたへ⑯

（宮城県サポートセンター支援事務所 アドバイザー 浜上 章さん）

生きがい仕事⑯⑯

Coco唐[ここから]（宮城県気仙沼市）



特集



「食」 でつなぐ



食べること。

それは生活に欠かせない営みであり、
また日々の楽しみでもあります。

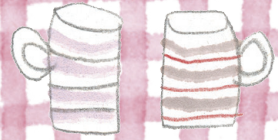


今回はそんな「食」についての特集です。

地域のオアシスとなっているお弁当屋さん。

新鮮な食材を楽しく買うことができる移動販売。

みんなが集まってくるカフェ。



おいしいところには、ひとが集まる。

ひとが集まれば、仲間ができる。

仲間ができれば、助け合える。

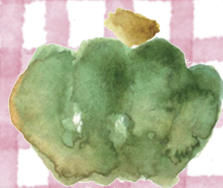


東日本大震災で感じた「食」のありがたみ。

食べられることが、あたりまえになった今日。

あなたのちょっとしたひと工夫で、

「食」が支え合いのきっかけに





DATA

オアシス

宮城県岩沼市二木2丁目5-6

TEL 0223-29-3138

営業時間：午前11時～午後5時

日曜定休

(事前に要望があれば定休日も対応可能)



弁当屋オアシスを立ち上げた大泉さん兄弟

暮らしに寄り添う弁当屋「オアシス」

◎オアシス(宮城県岩沼市)

ポイント

1. 食は生きる力になる！地域を支え、スタッフの心も支える。
2. 配達時の会話を重視して、見守りやきめ細やかなサービスにつなげている。

「家庭の味」を弁当に

宮城県南部の太平洋沿岸、阿武隈川河口の北岸に位置する岩沼市。市役所や商店が立ち並ぶ大通り沿いの一角に、手づくりの弁当屋「オアシス」がある。販売している弁当は一種類で、その名も「おばあちゃん弁当」。つくっているのは、長年家庭で料理をつくり続けてきた地元の女性たち。一種類といってもメニューは毎日変えており、おひたしや煮つけなど、地域で馴染みのある惣菜がたくさん詰められている。思わずほっとするような温かみのある家庭の味が、おばあちゃん弁当の魅力だ。

オアシスを立ち上げたのは、同市に暮らす大泉功太郎さん、俊介さん兄弟。きっかけは、2011年に発生した東日本大震災によって2人が実感した「食」のたいせつさにあった。

食べることの喜び

震災前、大泉さん兄弟は市内の耕作放棄地を利用し、観光農園を開こうと計

画・準備をすすめていた。しかし、津波被害により農園は浸水。ゴールデンウィークに開園予定であったが、栽培していた数十種類の野菜はすべて流されてしまった。「再起しようにも塩害により、数年間は作物を育てることができない。すごくがっかりしましたね」そう当時を思い起こす、オアシスの代表であり兄の功太郎さん。しかしその5か月後、2人は弁当屋「オアシス」を開店することになった。なぜ弁当屋だったのか、そのいきさつについて部長の俊介さんはこう話してくれた。

「あの頃は食べものがカップラーメンや乾パンのようなものしかなくて。生きていくのに、野菜とか果物、魚、そういうものはありませんでした。そうした生活が続いて、震災後はじめて食べることでできた『生』の食材が小松菜だったんです。ゆでて醤油につけただけのものだったんですけど、涙が出るくらいおいしかった」。食は生きる力になる。こんなにも人を感動させるこ



オアシス

代表 大泉 功太郎さん

「些細な見守りなのかもしれないですけど、

継続することが大事なんじゃないかなと思います」

とができる。その気づきから、多くの人たちに食を届けたいという強い思いが湧き出た大泉さん兄弟。2人の挑戦が始まった。

心いやす弁当づくり

店を構える場所は2人の実家である生花店を間借りすることに。少しでもまわりを活かづけることができればと、使用する食材は地元で採れたものを中心にすることを決めた。しかしここからが問題。弁当のメニューを考え、つくってみるも、料理経験の少ない2人にとって簡単なことではなかった。「2、3週間試行錯誤を重ねたんですけど、だめでしたね」「とても売り物として出せる味ではなかった」と話す、功太郎さんと俊介さん。そこで2人は同市で農家を営んでいた祖母に相談。祖母の農家仲間である、60〜70歳代の女性4人が手伝ってくれることになった。

心強い助っ人を得て、弁当づくりは勢いをつけた。「『この材料でなにができるかな?』って相談すると、



女性たちだけではなく、兄弟もキッチンに立ちます

次から次へとメニューが出てくるんです。農家なので野菜の一番おいしい調理方法も知っている。本当に心強いです」と、微笑む功太郎さん。

心強かったのは兄弟だけではなく、女性たちもまた、弁当づくりに心の拠りどころを見つけていた。女性たちは全員震災により自宅が全壊。夫を亡くした人もいる。しかし、弁当づくりをきっかけに集まるようになってから、女性たちの表情はどんどん明るくなっていった。「弁当屋が憩いの場になっていてることを感じました」と、俊介さん。

現在は4人の女性をパートとして雇用。今後、地元により多くの仕事を生み出せ

ればと、2人は抱負を語る。
おいしく食べてほしいから

2012年からは60歳以上の住民や一人暮らしの高齢者を対象とした弁当の配達も開始。バランスの良い食事を提供するだけではなく、配達をとおして高齢者への見守りを行うことが狙いだ。現在、定期的に注文している人は約20人。添加物の入っていない弁当のため、配達時に一軒一軒長居することはできないが、短い時間のなかでもしっかりとコミュニケーションをとることを心掛けています。「弁当を渡す際にお話をするっていう、本当に何気ないこ



真心が込められた「おばあちゃん弁当」

となのですが、毎回伺っているとご本人の様子や部屋の様子の変化になんとなく気づくんです。些細な見守りなのかもしれないですけど、そうしたちよつとしたことを継続することが大事なんじゃないかなと思います」と話す、功太郎さん。オアシスではそうした会話のなかで出た声をメニューに反映させており、たとえば、「ご飯はもうちよつと柔らかいほうがいい」などといった要望にも可能な限り対応。一人ひとりの要望に応えるのはたいへんなのではないかと問うと、「別の炊飯器で炊けばいいだけなので大丈夫ですよ。おいしいものを食べてほしいですし」との答えが。こうした柔軟な対応ができるのもオアシスの魅力の一つだ。

現在、弁当は530円（税込）、おかずのみだと400円で販売している。配達は昼と夜のみ。事前に相談を受ければ要望に合わせ、値段や内容を調整することも可能だ。暮らしに寄り添う弁当屋「オアシス」を、ぜひ一度訪れてみてはいかがだろうか。



DATA

直産 結ゆい

岩手県大槌町大槌第16地割25
JA 大槌宮農センター内
営業時間：平日 9時～17時
定休日：土曜、日曜、祝日
URL <http://sanchoku-yuiyui.jimdo.com>



仮設住宅の駐車スペースが、にぎわいのある青空産直に早変わり

笑顔と食の安心を届ける産直移動販売

◎産直 ^{ゆい}結ゆい (岩手県大槌町)

ライター：元持幸子

ポイント

- ・ 買い物を自分でする楽しみ、情報交換をする楽しみがある移動販売は、屋根のないサロン



農家から届く、とれたての新鮮野菜

移動販売も行う産地直売所

「おはようございます！結ゆいです。新鮮なお野菜や果物はいかがですか」と明るい声が移動販売車のスピーカーから流れる。その声を待っていたかのように、人々が移動販売車のまわりに集まり、ひときわにぎわう場となっている。岩手県大槌町に店舗を構える「産直 結ゆい」は、移動販売も行う産地直売所（産直）として町内の仮設団地を巡回している。

結ゆいは、東日本大震災の2週間前に開店し津波の被害を受けた。しかし、2011年7月には産直の店舗と移動販売をいち早く再スタート。その背景には、

周囲にお店のない仮設住宅での暮らしを少しでも楽しみたい、町の活気を取り戻そうという思いがあった。移動販売の産直は、震災後の変わりゆく地域とともに生まれ、今は町内全域を巡回している。

移動販売が果たす役割

リーダーの佐藤祐子さんは、「雨が降っても雪の日でも、お客さんが待っているのだから休んでいられないんです。移動販売では、特に野菜や食品を販売しています。買い物に行けない住民にとって、食事ができる安心をつなぐことにもなると思います」と、移動販売の現状を話してくれました。結ゆいが移動販売を始めた当初は、農家が産直に出荷する野菜を2か所の仮設住宅団地で販売していました。販売車のスピーカーより販売のアナウンスはするものの、買いたいものが出てくる人は少なかった。そこで、一軒一軒訪問し、店の説明や野菜の販売をしていた。「その当時は、支援物資の配布と間違えられることも

産直 結ゆい 佐藤 祐子さん

「移動販売は、買い物に行けない住民にとって
安心をつなぐことにもなる」



「現在の仮設団地へ週1回、同じ時間に訪問。徐々に移動販売結ゆいは、新たな団地に馴染みの存在となっていく。一度来たときは、〇〇持ってきてほしい」「孫のおやつになるお菓子がほしい」など、結ゆいのスタッフは笑顔でその注文を聞き入れている。お店が周囲にないため、日用品や手芸用品などもリクエストを受けることもよくある。細やかな客への配慮は、定期的訪問販売における対話から生まれてきた。それは、スタッフのやりがいにもつながっており、「移動販売は、お客さんとの距離感が近いので会話がとても楽しい」と、結ゆいスタッフは口をそろえて言う。

屋外の移動販売の店は、さまざまなものをつなぐ場となっている。旬のものやおいしい食べ方など、産直の強みである生産者の声を客に伝えることで、生産者と客をつなぐ。また、同じ団地内でも、「お久しぶりだったね」と、住民同士が

あったね」と佐藤さんは振り返った。
顔を合わせる機会となった。今年、コンサートがあるんだって」など、情報交換の場にもなっている。



販売車いっばいに商品を積んで移動販売へ

一人ひとりに寄り添って常連客には、外出の難しい高齢者や男性の客も多くみられる。訪問先やリクエストに合わせて、惣菜や日持ちする果物、小売りしやすい野菜などを取りそろえている。お米など重量のある買いものときは、玄関先まで一緒に歩いて配達することも。歩きながら生活の困りごとや日々の暮らしのなどを話すことも多い。高齢男性の客には、簡単な料理の方法を伝えたり、食

一人ひとりに寄り添って常連客には、外出の難しい高齢者や男性の客も多くみられる。訪問先やリクエストに合わせて、惣菜や日持ちする果物、小売りしやすい野菜などを取りそろえている。お米など重量のある買いものときは、玄関先まで一緒に歩いて配達することも。歩きながら生活の困りごとや日々の暮らしのなどを話すことも多い。高齢男性の客には、簡単な料理の方法を伝えたり、食

「結」の精神
移動販売を始めた当初の苦勞の一つ、客が来ない

移動が困難な住民には、旬の野菜や客の注文に 대응する商品を取りそろえて、商品を小分けのトレーに入れて自宅に訪問する。「自分で商品を見て選べることでよくて、いつも結ゆいさんが来るのが楽しみ」と話してくれた住民は、ヘルパーにつくってもらう食事の献立を考えながら、結ゆいのスタッフとの会話を楽しんでいる。



拠点店舗には「結」をアピールする看板



一人ひとりに寄り添う買い物支援

産直結ゆいに流れる、互いに助け合う昔ながらの「結」の精神が、農作物生産者と地域の住民を結び付け、地域での支え合いをさらにつなげていくだろう。



DATA

のぞみセンター

宮城県山元町山寺西頭無 43-81
TEL 0223-35-6901



のぞみセンターにはたくさんの笑顔があふれている

「ここに来れば誰かに会える！」 カフェは地域の居場所

◎のぞみセンター（宮城県山元町）

ポイント

・『ここに来れば誰かに会える』仕事のついでに来る人も、わざわざ来る人も、みんながつながる

地域のつどい場

宮城県山元町花釜地区に、町内外の住民たちが集う憩いの場所がある。のぞみセンターだ。もともとは、震災前より県内で活動していた日本キリスト改革派教会のメンバーとアメリカから同町へ支援活動に訪れていた大工たちが、津波被害にあった歯科医院を改修し、ボランティアの拠点として活用していた場所。しかし今、のぞみセンターは活動拠点としての役割にとどまらず、健康体操や英会話教室、子どもの遊び場などといった多彩な活動が毎日行われている。なかでも、毎週金曜日、11時から14時の間に開催される「のぞみカフェ」は、震災によって散り散りになっていた住民同士をつなぐ貴重な場となっていた。

カフェは 「出会い」がいっぱい！

のぞみカフェの開催日、扉を開けた途端、鼻をくすぐったのは、コーヒーの濃厚な香り。そして、からか

らと明るい話し声が耳に飛び込んできた。「この間は楽しかったね」「私ね、こんななのつくって見たのよ」。建物のなかいっばいに元氣な笑い声が響いている。

「仮設住宅に住んでいる人、仮設住宅を退去した人、被災したが在宅に暮らし続けている人など、暮らしている場所にかかわらず、みんなが分け隔てなく交流できる機会をつくりたいと思っていました」そう話すのは、スタッフの浜田唯さん。2013年2月からはじまったのぞみカフェには、近隣の住民だけではなく、町内の仮設住宅に暮らす住民や遠方に暮らす人たちも足を運んでいる。「震災を機に会えなくなっていた人同士がのぞみカフェで再会でき、うれしかったと喜ばれる姿も見られました。ここで知り合ってもらいました。ここにいれば仲良くなった人たちもいらっしやいます。『ここに来れば誰かに会えると思った』って話されることがよくあるんです」と浜田さん。のぞみセンターは町内の仮設住宅からは離れた距離にあるのだが、友だち同士車を乗り合わせるなどして、毎回多



スタッフとピアノを弾く武田清吉さん

くの人が訪れている。仮設住宅の集会所や地域でイベントなどがあっても、今暮らしている場所の垣根を越えて交流する機会というのは決して多くはない。そうしたなかで、誰もが気さくに集まれる場所というのは、強く求められていたのだろう。

100円でコーヒーと手づくりのケーキを味わうことができ、「今日はなんのケーキだろう」と訪れる人たちからは大好評。そのほかカフェ内へのお昼ご飯や小物づくりの道具などの持ち込みも可能だ。

また、こういったお茶飲みの場に男性が訪れるのは珍しいように感じるが、のぞみセンターでは男性の参加者も少なくない。常連の

一人である三島常康さんは、「仕事のついでにここに寄るんだ。いろんな話ができるし、本当に楽しいよ」と、笑顔で話す。話を楽しんでいると、ピアノの音色が。弾いているのは武田清吉さん。武田さんもまた、カフェの常連だ。「楽譜は読めないから、音を鳴らしてみて、こうかなって弾いているんだ。自分ではできているように感じるんだけど、どうかな？」と、武田さんはにこっと微笑む。

住民の想いをカタチに

2014年2月からは、月に1回仮設住宅から送迎を実施。噂を聞き、カフェに行ってみたいと思いつけながらも交通面の負担から行けないでいるという声を聞いたのがきっかけだ。「皆さんの声に耳を傾け、少しでもお手伝いができれば」と話す、のぞみセンター主任のカルビン・カミングスさん。住民たちの想いに寄り添い続けてきたのぞみセンターは、地域になくはない、たいせつな居場所になっている。

仙台白百合女子大学 人間学部
健康栄養学科 准教授

神田 あづさ (かんだ・あづさ)さん

新潟県出身。神戸大学大学院教育学研究科家政教育専攻家政教育修士課程修了。専門は「栄養教育」。現在の研究テーマは、長期的テーマとしては「食行動変容の効果的な栄養教育の探究およびライフステージ・ライフスタイル別の系統的栄養教育プログラムの開発」であり、短期的テーマとしては「L.Greenが定義する健康行動変容モデル適用の系統的給食を利用した栄養教育プログラムの開発」である。教育・研究のかたわら、ボランティア活動として仮設住宅での「料理教室」の講師を務める。



専門家に聞く地域づくりのヒント

地域の「食」は
心を紡いでできたもの

暮らしに寄り添う弁当屋「オアシス」

今回紹介された「オアシス」のお弁当は、見出しに書かれていたように「暮らしに寄り添う弁当屋」だけでなく、「人の心に寄り添う弁当屋」でもあると思います。それは、食べることの喜びを知っているづくり手の「購入者においしく食べてほしい」という気持ちがつくり出す心のこもったお弁当だからです。さらに、このお弁当は配達をとおしての高齢者の見守りや、その際に行われる会話が購入者の心の栄養になっているように思われます。もしかするとこの時、販売者も購入者から心の栄養をもらっているのかもしれない。

「オアシス」のお弁当は体だけでなく、心にも栄養を与えてくれる素晴らしいお弁当であると私は思います。

笑顔と食の安心を届ける産直移動販売

近年、問題となっている「買いもの弱者」。「買いもの弱者」とは、すなわち自宅から商店までが遠く自動車等を持たない、食料品や生活用品の買いものに支障がある人のこと。その数は、全国で910万人いるとも言われています。その人たちに、定期的に品物の購入機会を与えてくれる「産直 結ゆい」は品物だけでなく、いつでも買えるとい

う安心も地域の人々に与えています。これは雨の日も雪の日も、お客さんが待っているから休んではいけないというリーダーである佐藤さんの思いが、購入者に与える素晴らしい安心感といえるでしょう。そしてそれは、安心感だけにとどまらず、自分で買いものをする楽しみや、買いもの際に会話をすることにより得る情報（料理の仕方等を含む）をも購入者に与えてくれます。

「ここに来れば誰かに会える！」

カフェは地域の居場所

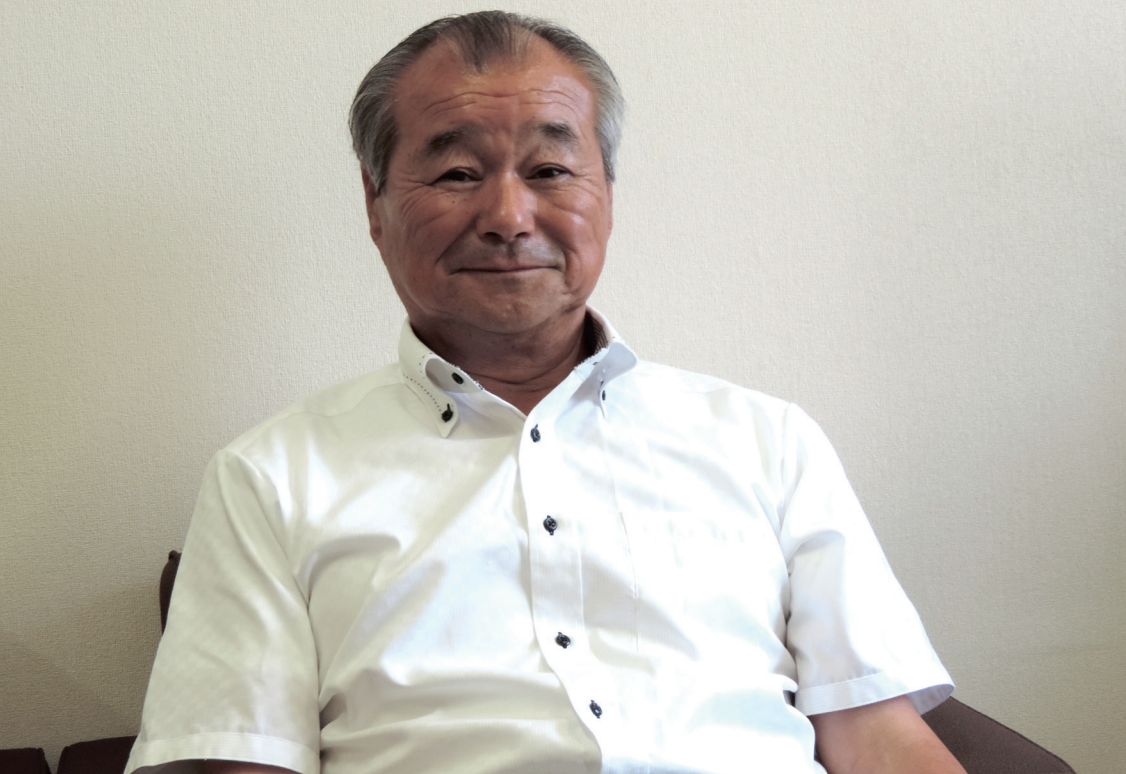
このカフェで提供される一番のものは、心のふれあいではないでしょうか。もちろん目に見え、口にでき、おいしいと思えるコーヒーと手づくりケーキのセットも好評のようですが、それ以上のものがこのカフェで手に入ります。それは、「ここに来れば誰かに会えると思った」という訪れた人の言葉がすべてを物語っています。たくさんの人と出会い、元気になり、もっとここにいたいと思ってしまう。そんな気持ちにさせるカフェは全国広しといえども、そうそうあるものではありません。このカフェは、この地域、このスタッフ、そして訪れる人たちがすばらしいからこそできた心に寄り添うカフェなのでしょう。

独自にケア付き仮設住宅を開設 障害のある人たちの地域生活を支援

宮城県石巻市◎社会福祉法人石巻祥心会

理事長

宍戸 義光さん



理事長 宍戸義光さん

宮城県石巻圏域で、障害のある人の地域生活を支援してきた社会福祉法人石巻祥心会は、東日本大震災でかろうじて津波の被害を受けなかったことから、地域の避難所として機能しました。2011年6月には、独自にケア付き仮設住宅「小国の郷」を開設。石巻圏域で取り組みをリードする理事長の宍戸義光さんにお話を伺いました。

地域生活支援

震災直後は周辺地域が浸水し、救助された地域の人たちが、ヘリコプターで次々と、法人が運営する障害者支援施設「ひたかみ園」の敷地内に降ろされました。建物を開放して、障害の有無にかかわらず100人以上がここで避難生活を送りました。混乱する状況のなかで、「福祉避難所は、障害のある本人以外は家族であつても利用できない」と断られた世帯や、一般の避難所で暮らしにくかった人、搬送先の病院で治療後に帰る先のない人などを受け入れました。その半数以上が、初めて出会う障害のある人たち。津波で家族や家を失い、単身になった人もいました。

日本財団の助成を受けて無我夢中で建設したのがケア付き仮設住宅「小国の郷」です。世帯用40棟と単身者用グループホーム（定員7人×2棟）で構成され、常駐のスタッフが見守りや相談に応じています。その後、自宅を改修・建て替えて退去した世帯もあり、現在暮らす26世帯は復興（災害）公営住宅への入居を待ち望んでいます。グループホームは、県から運営受託した仮設4棟を含めた6棟のうち、すでに3棟は本設へ移行しました。

今年度は、利用者の高齢化対策を計画。これまで同様、障害のある人たちの地域生活が豊かになるよう、職員のアイデアと創意工夫で取り組んでいきます。（談）





まちの仕組み

福島県川内村

23

原発避難後の古里再生に住民、 商工業者らが一丸

福島県川内村

帰村者の大半が高齢者

福島県川内村は、原発事故に伴って全村避難したあと、2012年1月に帰村を宣言。同年4月には役場を再開した。

帰村宣言から2年半。村の人口2746人のうち、村内生活者は1278人で、残りの1468人は県内外で避難生活を送る(2014年6月1日時点)。

村内生活者の多くは、仮設住宅や借り上げ住宅(みなし仮設住宅)を解約せず、村の自宅との間を行き来している。生活拠点を村に戻した完全帰村者は約500人。その多くが高齢者だ。

震災前は2〜3世代同居していた家族が分離、高齢者が村に戻り、子や孫の世代は、仕事や子育て、就学などで利便性がある避難先で暮らし続ける傾向が強い。高齢化率は、村全体で

36・3%。村内生活者

1278人のうち、65歳以上は530人で、高齢化率は41・5%。完全帰村に限れば、高齢化率はさらに上昇すると推測される。

村は、村外の仮設住宅などで暮らす避難者の支援を維持する一方、村内の環境整備や生活支援体制の構築に注力する。

2012年6月完成した村内の下川内仮設住宅(50戸)は、避難指示解除準備区域や居住制限区域に自宅がある住民向けで、現在49戸が入居。これを将来、高齢者住宅に転換することにしている。

建物はプレハブではなく、長期使用に耐える木造平屋とした。現状は1棟2戸だが、高齢者住宅への転換に際し仕切り壁を撤去するなどして一戸建てに改修する。転換後は定住だけでなく、一時的な利用も想定



村内にある下川内仮設住宅(50戸)。プレハブではなく通常の木造平屋で、将来改修し高齢者住宅に転換する予定

している。猪狩貢副村長は、次のように説明する。

「人里離れて暮らす高齢者に、冬期だけ、コミュニティを保ちやすい地域にある高齢者住宅に住んでもらうといったことが考えられる。生活上の不安や困りごとが生じたとき、自宅から

通ってもらおうような使い方もいい」

仮設住宅敷地から道路を挟んだ向かい側には、村社会福祉協議会が運営する、仮設住宅居住者の生活支援拠点「五社の杜サポートセンター」がある。仮設住宅の高齢者住宅への転換後も、その機能が維持される見通しだ。

同センターは、今年度中に近隣地に完成予定の災害公営住宅25戸(木造1戸建て)も、見守り対象とする。

配属されている生活支援相談員(以下、支援員)は1人。管理人も1人常駐し、通常それぞれ1人ずつの2人体制で運営する。

村全域で見守り活動を

支援員はほぼ毎日、仮設住宅を巡回し見守りを行っ



ている。見守りは仮設住宅に留まらず、周辺の自宅生活者にまで及ぶ。

見守り活動に関しては、村社協が来年度から、村全域の高齢者をカバーする方向で調整を進めている。

遠藤清輝事務局長は、「帰村者のための地域の支援員が必要です。村内に13人いる民生・児童委員とも連携し、仮設住宅で行っている見守り活動を村全域で展開したい」と語る。

村社協の支援員は現在、郡山市の仮設住宅3か所と同市内の借り上げ住宅



郡山市南一丁目仮設住宅にあるサポートセンター「あさかの杜ゆふね」。生活支援相談員が2人配属されている



村婦人会が、高齢者に生き生きとした暮らしを続けてもらおうと、畑仕事の交流事業を試験的に始めた

をカバーする「あさかの杜ゆふねサポートセンター」(南一丁目仮設住宅敷地内)に2人、いわき市四倉仮設住宅の集会所に駐在し、同市内2か所の仮設住宅を担当する1人、そして村内担当の1人で計4人。

村全域の見守りを実現するには、住民同士の支え合いも重要な要素になる。

実際、村保健福祉課の働きかけを受けて、村婦人会が昨年春に「見守り隊」を結成、独自の活動を開始した。同課によると、近所の高齢者への積極的な声がけなど、日常的な

かで自然な見守りが続いている。

また、婦人会は昨年、「お年寄り地域で生き生きと暮らし続けるには」をテーマにワークショップを開いた。そこで得た結論は「畑仕事」。

村の高齢者の多くは、長年農作業に親しんできた。「体力が落ちてひとりでは耕せないとか、せっかく野菜をつくっても、ひとりで食べるのは味気ないとか、(放射線への心配から)孫たちに送れないとか、いろいろな事情で畑仕事をあきらめている人が少なくありません。

そういう人たちに集まってもらい、婦人会のメンバーも加わって皆で作業すれば、引きこもりの防止や体力づくり、コミュニティの再生にも役立ちます」と、保健福祉課の猪狩恵子保健福祉係長。

今年6月には、上川内地区の遊

休農地を使って第1回目の畑仕事が行われた。婦人会メンバーと地域の高齢者ら約15人が畑を耕し、大豆の苗を植えた。大豆は主に枝豆として収穫する。畑仕事への参加・不参加を問わず、食事会を開いて成果を味わうことにしている。

これをモデル事業とし、効果を検証したうえで、来年度以降の活動方針を決める。

赤字覚悟で移動販売

民間の生活支援としてはこのほか、地場産品の直売所運営などを手がける合同会社かわうち屋(本社・川内村)が、高齢者の見守りを兼ねた移動販売を行っている。同社は、村商工会の会員らが出資し2009年に設立された。

移動販売は、軽保冷車1台が週2回、買い物弱者の高齢者宅を訪問する。事前注文による商品宅配にも対応。収支は赤字だが、同社は「ニーズがある以上、続けたい」としている。

村内の商業機能について



村の地場産品直売所「あれ・これ市場」と、高齢者宅に向かう準備中の移動販売車。ともに地元企業が運営している

は、生鮮スーパー、コンビニ、クリーニング店、薬局などで構成する公設民営の複合商業施設を新設し、買ひもの環境の改善を図る。来年4月の開業を目指す。村の構想によると、店舗は平屋建てで建築面積730㎡。建設場所は下川内地区の、仮設住宅や災害公営住宅の近隣地。村民のためのコミュニティスペースも設ける。村民同士の交流や、高齢者の日中の居場所づくりに一役買いそうだ。

術・芸能活動をあと押しすることで推し進めている。神楽、獅子舞などの伝統芸能は、ほぼ全地区で復活した。カラオケ、フラダンスといった演芸・娯楽サークルや、ソフトボール、バドミントンなどのスポーツクラブも相次いで活動を再開している。婦人会と老人クラブが、共同で介護などの勉強会を開く「中央学級」の取り組みも復活した。

教育課の大山浩志生涯学習係長は、「スポーツ活動に比べて社会教育活動はやや手薄です。今後は力を入れていきたい」と意気込む。

具体的には、帰村した小学生28人を対象とした「放課後子ども教室」などの場を活用し、高齢者が子どもたちに地域の文化や生活の知恵を教えるといった、世代間交流を促す事業を検討するという。

こうした一連の取り組みは、被災地だけでなく、過疎や高齢化に直面する全国の地域にとって、貴重な参考事例になるだろう。

木



支援員のための 地域生活支援

「困った」ときのQ&A ②

アルコール依存

アルコール依存症の ひとり暮らし高齢者の支援

Q Fさん（70歳男性）は、離婚して仮設住宅でひとり暮らし。お酒ばかりを飲んでおり、みるみる体が弱って入退院を繰り返しています。1か月ほど前、同じ仮設住宅のひとり暮らしの飲み友だちがアルコールで急死したことにショックを受け、しばらくお酒を控えていましたが、また飲酒を再開しています。この仮設住宅には同様の問題を抱えた人がいます。再び突然死が発生しないよう、地域で取り組めることはありますか。

A アルコール依存症は、本人が断酒しようと行動を起こさない限り解決の道が見出せない病気です。Fさん自らがアルコール依存から抜け出したいと思っているなら、退院の際に生活支援と一緒に考えることがたいせつです。相談窓口である保健所・精神保健センターやア

ルコール専門の病院・クリニックを紹介しましょう。友人が亡くなったときに断酒しようとした行動は、彼の強さではありませんが、自分だけの力で生活を変えることはたいへんなことです。そこで、同じような体験を共有し、立ち直った仲間が集まる自助グループ（断酒会）に参加すること

で、断酒の方向へ進むことができます。

支援員は、治療とともに生活支援を組み合わせることを考えるとよいでしょう。アルコールに依存しなければならぬFさんの背景に寄り添いながら、お盆や年末年始など家族団らんの時間が多くなる時期に、気楽に立ち寄れる場所づくりや、Fさんが得意なこと（大工仕事・園芸・趣味活動など）に焦点をあてて役割をつくり、地域で孤立しないように支援しましょう。

また地域で、アルコール依存症から立ち直った人から話を聞くプログラムや相談会を開催し、アルコール依存症のある人が自分を見つめて考える機会を提供するとともに、アルコール依存症に対する偏見をなくしていくきましょう。とにかく支援員は、時間がかかることを肝に銘じて、あせらずにかかわることがたいせつです。

ヒントになる キーワード

◎ひるまず、出しゃばらず、相手の歩調に合わせよう

支援者は、要援護者との関係をひるまない、出しやばらず、歩調を合わせることができ

◎地域は資源の宝庫ととらえ、地域をよく知ろう

支援者は、地域が資源の宝庫であることとらえ、担当地域を知り、地域とつながり、地域づくりができる

◎できないことを探すより、できる力を見つけよう

支援者は、できないことを探すより、できる力を発見することができる

隣の団地ばかりと 交流する人への接し方

Q 関西出身のHさんは、言葉や文化の違いから、同じ仮設住宅の住民とはなじみの関係になれませんでした。隣の団地には、知り合いがいたため、いつもそちらの団地のイベントなどに参加していたところ、それを同じ仮設住宅のリーダーにとがめられてしまいました。Hさんは、「もう隣の団地には行きにくくなってしまった」と言います。Hさんに、どのように接したらよいでしょうか。

A Hさんは以前住んでいた地域で、どんな活動に参加され、その地域のなかでどんな役割を担っていたのでしょうか。趣味や特技、興味はありますか。

支援員には、仮設住宅を訪問するなかで住民と顔見知りの関係を築き、お茶っこ会などの集う場を支援している強みがあります。仮設住宅内での集いの際に、住民にHさんを紹介し、仲間づくりの支援や、Hさんの特技や趣味などを生かしてもらう機会を検討してみましょう。

Hさんだけでなく、子育て中のお母さん、介護している人のなかには、「できれば同じ立場の人と知り合って、情報交換したい」という思いをもった人たちがいると思います。隣の団地にも、同じような思いや悩みを抱えている人がいるかもしれません。

自分が支援する仮設住宅だけにこだわらず、周辺の団地や住宅が集まってそれぞれの現状や課題などを共有し合うことによって、地域のネットワークや活動の

ヒントになる
キーワード

◎寄り添う姿勢と広い視野をもとう
支援の基本は、寄り添う姿勢と広い視野

◎気づきあげた信頼関係を資源として活用しよう
支援者は、築きあげた信頼関係を資源として生かすことができる

◎相手（要援護者）が折り合いをつけられるように支援しよう
支援者は、相互の違いを理解したうえで、折り合いをつけられるよう支援することができる

広がりが生まれます。

「自分が住んでいる仮設住宅のイベントしか参加できない」のではなく、「仮設住宅も隣の団地も同じ地域なので、地域内のイベントにはどれでも参加できる」ようになれば、住民同士が知り合い。参加できる集い場が増え、暮らしがより豊かになります。このときこそHさんの出番です。Hさんは両方の住宅の住民を知る立場として、つなぎ役になることができます。

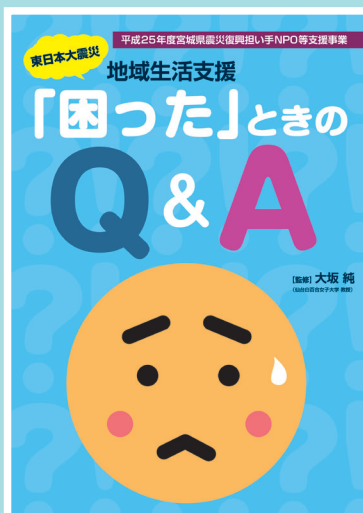
東日本大震災・地域生活支援「困った」ときのQ&A

監修：大坂 純（仙台北百合女子大学教授）発行：全国コミュニティライフサポートセンター

長引く仮設住宅暮らしは、住民同士の支え合いを生む一方、閉じこもりや孤立、アルコール依存、精神障害などの問題も引き起こしています。自立再建や災害公営住宅への転居が増えるにつれ、仮設住宅に残る人への配慮も課題になってきます。災害公営住宅など移転先では、コミュニティ形成支援が求められます。

複雑さを増す被災者支援の一助として、実際にあったエピソードから典型的な50の事例を抽出、対処法をQ&A方式で解説する『東日本大震災・地域生活支援「困った」ときのQ&A』を作成しました（平成25年度宮城県震災復興担い手NPO等支援事業）。対処法は東日本大震災だけでなく阪神・淡路大震災の支援関係者の協力も得て構成しました。随時、その内容を抜粋し紹介します。

全文はHPで公開中 http://www.clc-japan.com/research/2013_03.html





希望ある地域にいる、 3タイプの「思い人」

東京大学 社会科学研究所 教授

玄田 有史



沖縄で、鹿児島から移住してきた青年に会った。「沖縄に移り住むことを決めたとき、思い出に残っていることは？」「沖縄の知り合いから『なんくるなく』はないよ』って聞きました」。彼は、明るい笑顔で答えた。

「なんくるないさー」は、本土でも有名な沖縄言葉の一つだ。ただ、その言葉、誤解を伴って流行ってしまったことに、沖縄のおぼあたちは、少しがっかりしているという。そんな話を以前、沖縄でNPO活動をしている愛知県出身の男性から聞いた。

本土の人や、沖縄県内の若い人まで、「なんくるないさー」を「なんくるなくよ」とか、ときには「適当でいいんだよ」という意味でふだん使う。言われた『なんくるなく』はないよ』も、「いい加減な気持ちで準備の不十分なまま移ってきて、後悔するだけだ

よ」という意味だったろう。準備を整えて、慎重に決断をすることが大事だ、と。

それはそれでたいせつな忠告だ。ただ、おぼあに言わせれば、「なんくるない」の正しい意味はそうではないという。

「一生懸命地道に努力をしていれば、いつか必ず報われるときがある」というのが、本当なのだ。

「移住をすると辛いこともあるだろうけど、それを超えるために、やるだけのことはやるうねー。そうすれば、何があっても『なんくるないさー』』というのが、沖縄への移住を考えている人への真実のアドバイスなのだ。

あるときから、地域の活性化には「よそ者、若者、バカ者」が大事だ、と言われるようになった。地域を元気にするのは、過去の経緯や常識などにとらわれない存在が必要というのは、きつと

そうなのだろう。

ただ、地域のなかには、何も知らないよそ者が、土足のままでズケズケと入ってきて、かき回すだけかき回し、大混乱に陥れたまま去っていったところもある。若者が年配の経験者、「古いだけ」とバカにして何も学ぼうとせず、結局は前と同じ失敗を繰り返すこともある。自分の未熟さや愚かさを自覚せず、横暴に振舞うだけの者は、本当のバカだ。

それよりも、希望のある地域には、決まって3つのタイプの「思い人」がいる。最初に斬新なアイデアを「思いつく」人。そしてすばらしいアイデアを具体化のプロセスに落とし込むことができる「思い込み」の人。そのうえで欠かせないのは、みんなの夢を実現させる「思い遂げ」の人だ。人には誰でも得意、不得意はある。でも、3つの思い人のどれかにはなれるかもしれない。それぞれの思い人は、まるで取りつかれたかのように、やれるだけ

のことをやろうと、しやにむに地道な努力を今日も各地で続けている。そんな思い人こそが、本当の意味で「なんくるない」人なのだと思う。

●プロフィール

げんだ・ゆうじ=東大経済学部卒、ハーバード、オックスフォード両大の客員研究員、学習院大経済学部教授などを経て、2007年より現職。専門は労働経済学。2005年より「希望」を社会科学的に研究する希望学を提唱。岩手県釜石市や福井県などで地域調査を行ってきた。著書に『希望のつくり方』(岩波新書)、『孤立無業』(日本経済新聞出版社)ほか。岩手県東日本大震災津波からの復興にかかる専門委員、釜石市復興まちづくり委員会アドバイザーを務める。



宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ



サポートセンター行脚

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

—ある社協マン②—

引き続き、支援する側の個性について考えます。
客観的に、距離を置いて人を見つめる支援や「間違わない」支援ということに囚われるワーカーが多くいますが、このこと自体がすでに間違っています。間違いに気づくことができる工夫や、軌道修正する柔軟さが、現場のワーカーに必要な「力」といえます。

地域の最前線で支援をする者は、基本的に個性的であるべきです。その考えは古臭い、とご指摘になる社協マン、専門職の人もいると思いますが、その支援者の持つパーソナリティーを活かす支援、その人らしい支援を活かすところ、専門職の役割でしょう。

前回ご紹介した、とある市町の社協マンは、最近偉くなっておもしろくない感じが感じられます。現場主義の人ですから、現場のワーカーがうらやましいのだと思います。しかし、組織を超えて協働で動いた時と変わらぬ「想い」があれば、現場の支援者のコーディネートやマネジメントは大丈夫、間違いありません。

市町社協の職員と付き合う機会が多くなりましたが、この好漢親爺とどこか「匂い」が似ています。同じ臭さ、というと怒られると思いますが、私には不快ではありません。加齢臭とは違うので…。

サポセンを受託運営する社協が多いなか、社協の「力」が問われています。現場で揉まれた社協マンが、活躍する 때가 来 ました。地域福祉の視点で、被災した地域社会を復興させる役割を担う社協マンがうらやましい。

私も若ければ、社協に入社したい！門前払いになりそうですが、今回もまた、生臭い話になりました。右の浜上さんの文章を読んでいただき、毒を溶かしてください。ところで、この社協マンとは誰か、あなたですよ！！！！

ひとりごと

サポーターのあなたへ

宮城県サポートセンター支援事務所
アドバイザー 浜上 章



支援者が想う被災者ニーズと 実際の支援の間に・・・

ある「支援者連絡会」でのワークショップで、「被災者にとって現在、そしてこれからたいせつなこと、必要なことは？」という設問で支援員が挙げたものは、①目標や将来の希望、生きがいがづくり、同順位で、経済的安定 ②住民同士のつながり・コミュニティづくり、③心と身体の健康づくり、④安心できる住まい、⑤相談できる場・外からの支援——などの順でした。それに対して、「支援者としてやっていること、やれることは？」という設問では、①住民同士のつながり、コミュニティづくり、②心と身体の健康づくり、③相談できる場、外からの支援、④目標や将来の希望、生きがいがづくりへの支援——などの順でした。このことから、最も重要と思われていた“目標や将来の希望、生きがいがづくり”への支援が、実は、手薄な状態であることが明らかになりました。

震災から3年経った今だからこそ、これまでの精一杯の取り組みがあったからこそ、ニーズと支援の間のズレに気づいた、ということかもしれません。

被災者支援のなかで、どこまでの支援を目標とするかはさまざまな意見があると思います。現実的には難しいことかもしれませんが、一人ひとりが安心して生活でき、そのうえで他者や地域とつながりを持ち、その人の楽しみや生きがい、持っている力を活かしながら、地域で役割を果たせる暮らしや生き方の支援ができれば、素晴らしいと思います。

対人援助に携わる立場として、支援目標のレベルを一段上げて、“**目標や将来の希望、生きがいがづくりへの支援**”が少しでも実現できるようになればと思います。

平成26年度 宮城県被災者支援従事者研修

スーパーバイザー研修

【仙台会場】9月26日(金) 会場未定

●テーマ

「業務としてのスーパーバイザー」「つなぐ支援を念頭においたスーパーバイザーの役割」「マネジメント業務の振り返りとスーパービジョン機能」「復興期を視野に入れた組織内マネジメント」「阪神・淡路大震災の教訓に学ぶ災害公営住宅への転居期の支援等」

講師：平野隆之(日本福祉大学教授)、佐藤寿一(宝塚市社会福祉協議会事務局長)ほか

宮城県サポートセンター支援事務所

〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町3-7-4 宮城県社会福祉会館3階 TEL 022-217-1617 FAX 022-217-1601



「ここから」元気を発信 大漁旗模様の布製小物で

Coco 唐 (宮城県気仙沼市)

090-3753-1011 (代表: 梶原尚子)



Coco唐代表の梶原尚子さん(前列右)とメンバーのみなさん



大漁旗のプリント生地を使ったオリジナル商品

大漁旗のプリント生地をあし
らった色鮮やかなバッグ、ポ
シエット、サイフ、スマホ入れ：
これらは、気仙沼市唐桑町の女性
4人が立ち上げた布製小物の工房
「Coco唐(ここから)」の製品だ。
工房の名称には、「ここから」「こ
ころから」元気を発信したいとい
う、復興に向けた思いが込められ
ている。
メンバーは震災前、地元で水産
加工などに従事していたが、勤務
先は津波で流され、職を失った。
少しでも収入を確保しようと、
2011年6月、仙台市の支援団
体が呼びかけた雑巾づくりに参加。
これがきっかけとなり、翌年7月、
自分たちの工房を立ち上げた。
「いつまでも雑巾だけではだめ、
なにか自分たちのオリジナル商品
をつくりたいという思いが強まり
ました」と、代表の梶原尚子さん。
製品デザインを考えていると
き、偶然、大漁旗をモチーフにし

た生地を見つけた。港町にふ
さわしく、しかも被災の暗い
イメージを吹き飛ばす力強さ、
華々しさがある。
製品は現在14種類(サイズ違
いを含めれば23種類)。町内を
はじめ、気仙沼市、仙台市の商
店などで販売するほか、支援団
体によるネット販売やカタログ
通販にも出品。フランスやハワ
イなど海外にも紹介され、好評
を博している。
収入は、震災前の勤めの半分
程度。それでも「ここではみん
なが主役。とてもやりがいがあ
ります」(梶原さん)と意気盛
んだ。ものづくりで元気を発信
していくことが、「多くの人か
らいただいた支援への恩返しに
なる」(同)とも。
海沿いの小さな工房で、女性
たちが誕生させたものづくりブ
ランドは、ゆっくと成長を続
けている。**木**

☆次号予告 特集「島と震災」

購読者を募集しています!

「月刊 地域支え合い情報」を年間購読しませんか?

●購読会員 年3,696円(年12回、送料込み)

購読ご希望の方は下記口座へお振り込みください。編集部にて確認次第、情報紙を発送いたします。

<お振込先> ●ゆうちょ銀行振替口座
口座番号: 02260-9-46303
加入者名: 全国コミュニティライフサポートセンター

※通信欄に、「地域支え合い情報紙 購読費」と記入したうえで、①お届け先の住所と②何号からの購読申込みかを、記入してください。

お知らせ

平成26年度 岩手県災害公営住宅への移行研修

《災害公営住宅への移行研修(実践編)》

テーマ: 「次の世代につなぐ地域コミュニティ形成支援」

「阪神・淡路大震災の教訓に学ぶ災害公営住宅への移行支援」ほか

講師: 広田純一 岩手大学教授、佐藤寿一 宝塚市社会福祉協議会事務局長ほか

【釜石会場】9月1日(月) 岩手大学釜石サテライト 【大船渡会場】9月2日(火) 大船渡合同庁舎

平成26年度 岩手県高齢者等サポート拠点職員等研修

《分野別研修1》

テーマ: 「精神疾患の人への理解と支援」「アルコール依存症の理解と支援」など

講師: 大坂純 仙台白百合女子大学教授ほか

【宮古会場】9月8日(月) 宮古地区合同庁舎 【釜石会場】9月9日(火) 小佐野公民館

読者の声

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ(地域づくり)から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想をFAXまたはメールにて編集部までお聞かせください。

23号を読んで…

・福島県の原発避難者などの支援活動に携わっています。被災自治体ごとの支援の体制や、さまざまな団体が各地で取り組んでいる支援の様子がわかり、とても参考になります(仙台市・Mさん)

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください!

TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737

E-mail joho@clc-japan.com

編集後記

布製小物の製作工房「Coco唐」(本ページ上段記事)は、オーダーメイドにも対応していて、記者は取材時、一眼レフカメラ用のソフトケース(緩衝材入り)を注文しました。もちろん大漁旗模様です。仕事の疲れも吹き飛ばそう。(木村)